

千年 阿部昭



目録の行入に
ぐ悲哀をこめた視
線、父と子の屈折
した共感……みず
みずしい感動の世
界を創る連作小説
「千年」「桃」「沼」
「子供の墓」「父と
子の夜」を収録。

毎日出版

文化賞 受賞

千年

講談社刊——六〇〇円

千年

*Upon a child that dyed
Here she lies, a pretty bud
Lately made of fiesh and blood:
Who, as soone, fell fast asleep,
As her little eyes did peep.
Give her strewings; but not stir
The earth, that lightly covers her.*

阿
部
昭

講談社

千年

昭和四八年四月二日 第一刷発行
昭和四八年一〇月二八日 第二刷発行

著者 阿部昭

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二／郵便番号一―二
電話東京(〇三)九四五―二二(入込表)／振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 六〇〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© Akira Abe 1973. Printed in Japan

目次

千年

5

桃

27

沼

49

子供の墓

71

父と子の夜

91

後記

237

装帧
駒井
哲郎

千
年

千
年

町では旗が目についた。日の丸と、ナチスドイツの鉤十字と。ムッソリーニのイタリアは、赤と白と緑の三色旗に王冠と十字のしるしがついていた。子供の彼には、前の二つにくらべて最後の旗は、どこか類型的で、よわよわしく、威厳に欠けるように感じられた。それはともかく、その年はいろいろなことがあった年だ。

春には、この町が市になり、市制施行記念の文字の入った安物の湯呑み茶碗が全世帯にくばられた。それから、秋には、父が金モールづくめの大礼服と大礼帽を押し入れの襦かひくさいスーツケースから出して着るのを見た。これは彼には初めての、父には最後の機会だった。その前の観艦式の時には、まだほんの赤ん坊だったから。

その日、彼は、父があるだけの勲章を胸に吊したところも見たが、父が大して勲章を持っていないのがわかって失望させられた。その盛装で、父は一般の人間といっしょに朝の電車に乗って出かけた。彼は自分のことのように気恥ずかしく、父もさぞきまりが悪いだろうと考えて同情した。

横浜のずっと沖合いの海上に、たくさん軍艦が何列にも並んで、夜はいっせいにイルミネーションをともした写真を彼もあとで新聞や絵葉書で見た。その晩、父は一杯機嫌で引き出物の折り詰や干菓子なんかを持って帰った。ニワトリの腿焼きのようなものもあった。その脚にも菊の御紋章がついていた。陛下から賜わったニワトリ。

紀元二千六百年。そういう言葉が、大人たちの話ややはり唄の文句にも聞かれたが、このよくな祝い事のすべてが戦争の前ぶれであるとは、彼は知らなかった。その年、彼はミッシェンスクールの幼稚園の二年目で、らいねんは小学校だった。さしあたって彼の関心は、将来の戦争にも父のいる海軍にもなかった。彼がかよわされていたのは、女の学校だった。

彼は、白い百合のマークの縫い取りのある紺のセーラー服に、揃いの半ズボン、黒いゴムのあご紐がついたやはり紺のお釜帽子に、弁当とナプキンを入れた小さなバスケットをさげて、電車でかよっていた。つぎの駅まで約三分。そこが終点だった。駅の建物は、龍宮城をかたどって、屋根には鯨しやらほこが躍り、全体に毒々しい朱や青に塗ってあった。改札口を出ると、海と島と棧橋とがすぐ目の前に見え、顔に潮風があたるのが感じられた。

海とは反対の方向に学校まで歩いて行くあいだ、彼と同じ制服の先輩の少女たちが、生徒同士で、あるいは同じ電車で降りたマースールにむかって、「ごきげんよう」「ごきげんよう」と呼ぶかける小鳥の囀さえずりが、ひっきりなしにまわりでした。おはよのうの時にも、さよならの時に

も、「ごきげんよう」というのがその挨拶だった。この女言葉は、男子禁制の学園のほんの一とかたまりにすぎない幼稚園の男児にも適用された。だから、これが彼の仕込まれた人生最初の教育だ——「みなさん、ごきげんよう！」彼は教えられた通り、毎朝機械的にその黄色い囀りをくりかえしながら学校に近づいた。

女学校は、きたない川が海にそそぐ、そのほとりにあった。空から見たら、たぶんいびつな五角形の敷地、松林のあいだに見える二階建てのくすんだ桃色のスレート屋根、見上げるような高い石垣の塀。いったん校門から外へ出ると、もう別の入口からはいるわけには行かなかった。あやしげな男が周囲をうろついたり隙間から覗いたりするだけで、事件になった。そもそも男子というものが、ここではめずらしかった。男の職員もいたが、いざみつけようとすると、どこにいるのかわからないくらいだった。どっちみち、ここは女の王国だった。

マースルと呼ばれる女性たちがいて、彼女たちがすべてを支配していた。清浄で、優しく堅固で、純潔で、孤独で、人間ぎらいのような聖女たち。ビー玉のような青い眼と、刃物のようになすどい鼻梁をしたフランス人の尼さんもいた。おお、そこではこんなことがささやかれていた——マースルは、風呂に入る時もあの白い尼僧帽（ゴルネット）をぬがないし、普通の女性みたいに素っ裸になったりはしないのだ、と。彼もさすがに変だとは思いつながら、それを信じかけていた。浴室のもうもうたる湯気の中で、マースルたちがコルネットをかぶったまま僧服の裾をからげ

て、器用にも下半身だけ湯につかっている。その光景を彼は見るように思った。そんなことができるかしら？ でも、それが厳しい戒律というものなんだろう。でも、それにしても、不衛生だ。そんな目で、彼は、うすぐらい廊下のむこうから滑るように歩いてくるマースールたちを見守った。彼女たちが急ぐと、腰に下げた銀の十字架のついた黒い数珠じゆずが、黒い長い僧服のゆたかな襷ひだの上を魚のようにビョンビョン跳ねあがり、誰にもけっして見せない腿のへんをむち打った。

若いマースール、井田先生が彼を受け持った。もつとも、子供の目には大人の年齢はぐっと誇張されてうつるものだから、彼には自分の母よりいくらか若いぐらいにしか見えなかった。すなわち、姉には大きすぎるけれど、自分の母親がそうだったらよかったのと思うぐらいの女性。彼は母が三十いくつになってから生んだ子だった。それに井田先生は、身のこなしも言葉づかひも、淑とやかな令夫人をもって自任していた彼の母以上にしとやかだったから、よけい老けて見えたにちがいない。全部が全部美人ぞろいというわけにはとても行かないマースールたちの中では、井田先生の美貌はきわだっている、というのが母や他の父兄たちの見解だった。「どんな事情がおりなのかしら、あんな別嬪のお嬢さんが？」母は、そんなことには興味のない彼をつかまえて詮索をはじめた。

クリスマス・カードの宗教画などでうなだれているのがよく見られるタイプの、細おもて

の、青白い横顔。さしむかいにさせられた時、すぐ近くで見ると、化粧をしていない彼女の口のまわりに、こまかいぶ毛が金色に光っていた。遠くから見ると、光線の加減で、それがうすい鉛筆のらくがきのように見える。モナリザの口ひげみたいだ。どうしてそんなものが生えているのだろうか？ その毛を父のように自分でかみそりで剃っている井田先生の姿を彼は想像した。あの不思議な入浴シーンと並べて。

彼女は、髪はコルネットで、喉元は高い白いカラーで、首から下は黒づくめの僧服で、足はむろん黒い靴で、というぐあいに完全武装していた。しかし、たった一つ隙があることを知っていたらどうか？ それは襟あしの毛だ。子供たちを相手に屈んだり、しゃがみこんだりしたひょうしに、それがのぞいた。コルネットをかぶるには、後髪をすっかり持ち上げて、何本ものピンでしっかり留めてからのせるのだろう。だが、その青白いうなじに、生えぎわの黒い毛がほんのわずかはみ出していた。その毛を見ると、彼は落ち着かなかった。グロテスクで、獐猛な感じだった。それは母の内股の毛を連想させた——マースルとは違う母のような世俗の女の野蛮な肉体の毛を。

学校から海までは、遠足にしては近すぎ、体操の行進には遠すぎる距離だった。一と月に一回ぐらい、天気の良い日に、彼はマースルに引率されて海岸まで歩かされた。河口の松林の入口に、乃木將軍の銅像が立っていた。乃木さんは、海を背に、双眼鏡を片手に、ずっと陸

のほうを睥睨^{へいげい}していた。どこを見ていたのか？ 黒いボタンを二つはめこんだような將軍の眼は、何も見えない暗い空洞のようだった。いつも鳩がむれていた。軍帽や肩章のところにとまって、軟かい糞をたれながした。その下で彼は弁当をたべた。彼が最も好んだメニューは、三色ランチと三色サンドイッチだった。何でも三色がよかった。それがばかに気に入っていた。

三色弁当の作り方——ピンクのそば、と、黄色い煎り卵と、ホウレン草かなにか、濃いみどりの野菜。彼はホウレン草がたべられなかったが、配色上がまんしていた。大体それは、彼が母の婦人雑誌のバックナンバーでみつけたものだった。だが、彼が何度こまかく注文をつけても、母はその写真通りの色を出せなかった。かんじんの赤は、しばしば挽^ひき肉の茶色でごまかされた。そこで、しまいには、母が彼の要求をうわのそらで聞きながしているのか、雑誌の口絵の色が嘘なのか、どっちかだと思った。たぶん、両方だったのだろう。母が持っている料理や菓子^{お菓子}の作り方の本は、お菓子のくに、という絵本とならんで、彼が最もよく開く本だった。そこについてのいるケーキやキャンデーの多くは、一度はたべた記憶があるが、いまではその味をほとんど思い出せなかった。町の菓子屋に売っているのは、けちくさい国策型のキャラメルとチョコレートだけだった。なにやら架空じみた昔の菓子類の極彩色の絵。それが昼間でも彼をうなしにかかった。

いずれにしろ、彼はこうした生活の変化に気もそぞろだった。だが、最初から何もかもうま

く行つたわけではなかった。彼はそれまで近所の子供たちとも遊んだことがなかった。遊び相手といえば、たまに往き来するずっと年上のいとこたちしか知らなかった。入園式は無事に入った。二日目、母が玄関の下駄箱のところまで送ってきて帰ろうとしたとき、彼は泣きさげんだ。そのように泣いた園児は彼一人だった。母は立ったまま、マスールはしゃがみこんで、彼を説得しにかかった。彼は母の着物の袂たもとをきつく握りしめたまま、絶対にその場から動かなかつた。これが、彼の井田先生とのなほだ不名誉な初対面だった。結局、彼は自分のクラスの始業を大巾に遅らせたあげく、やっと教室入りした。ただし、母をずっと外に待たせておくという条件つきで。

やがて母は女中にバトンを渡し、女中もいつか彼の送り迎えから解放されたが、彼は母がいつまでもその日のことを語り草にするのをにくんだ。なんというスキャンダルだろう！ 寝小便や大便の粗相以上だ。彼の失態は親戚じゅうに知れわたつたにちがいない。わけても、彼は二人のいとこたちに知られたくなかつた。二人とも、その女学校の中等部と初等部にいた。裕子はもう大きすぎて彼の相手ではなかつたが、玲子は彼の姉であつたとしてもおかしくなかつた。彼のような年齢と境遇では、そうした判断こそ異性をえらぶ上での決め手だつた。みんなからベティさんとかベテさんとかいわれている玲子。彼としては、たぶんこれまで以上に彼女を見るチャンスがあるだろう、昼間はずっと同じ場所にいるのだから、とそう思っていた矢先

だった。その頃、彼が好んでふける空想の一つは、このいとこが大怪我でもするか、重い病気にでもかかって、彼の見舞いをうける場面だった。彼女をかいがいしく手当てしたり、枕もとで看病したりする、可愛い、やさしい従弟の自分を売りこもうとして。それが、入園早々の醜態で、彼は自信をなくしてしまった。すっかりしおれていた。

そうだ、彼が以前からあこがれていた隣の町は、ただ彼の幼稚園がある町というだけではなかった。そこには、母のすぐ上の姉が住んでいた。つまり、裕子や玲子の母親である片瀬の伯母とみんなが呼んでいた伯母が。この伯母は、やもめ暮らしだった。たぶんそのため、その町は子供の彼に、なまめかしい女たちの町、というふうに感じられていた。そして、いつか彼の足がそこから遠のくことになるのは、伯母がさらに年をとり、いとこたちも結婚してよその土地へ出て行くからだ。かつて彼をひきつけた同じ女たちが、今度は彼を遠ざける。さびしい老女たちの町になる。

彼はたしかめたわけではなかったが、この伯母が隣町に住むようになったのは、きっと彼の両親のせいだった。彼の父と母が家を見つけてやり、関西から呼びよせたのか、むこうから妹夫婦をたよって上京してきたのだろう。伯母はそれ以来ずっと陰気な借家ずまいをしていた。昔はよかったという話とはうってかわった、つましい生活だった。浪費家の癖がぬけないといわれながらも、伯母はガスのメートルの器械の上にも濡れ雑巾を置いていた。そうすると